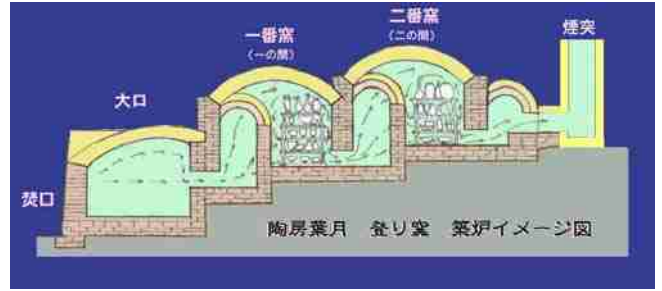


山口市吉敷 萩焼陶芸家 田中講平さんが築いた登り窯 初窯・本焚きを見学 2011.1.15.



2011. 1月 登り窯開窯



こつこつと一人で煉瓦を積んで 約1年かけて自作の登り窯築造を続けてきた山口市吉敷の郷 萩焼陶芸作家の田中講平さんから、

「1月15日 いよいよ登り窯に火を入れる初窯・焚き上げ。
多くの人があるので 見学にきませんか」

と声をかけていただいた。

現在 陶芸の窯は、ガス窯・電気窯がほとんどで、萩焼もその例外でないとお聞きますが、約1年ちっと前 田中さんから

「やっぱり 自前の登り窯を持ちたい。
もう場所も構想もできているので、材料を集め、
作陶の合間に自作で 陶房の背後の山際に登り窯
を築くつもり」との電話をいただいた。

山口県立美術館で萩焼の展示を案内をしてもらった時に赤みを帯びたグラディエーションが浮かび上がる萩の肌を眺めながら「どうしても 出したい萩焼の味がある」と熱っぽく解説してもらった田中さんの顔がすぐに頭に浮かぶ。これを探求するんだなあ・・・と。

でも、初めは半信半疑 よもや本当に一人で 登り窯の築造を開始されるとは・・・

「窯の天井の内側からの支えどうする??? 落とさぬよう 出来るまで 中に入ったら あかん。窯の仮焼き そろりと」などと素人が心配しましたが、 御自分のアイデアも随所に盛り込んで この1月 めでたく完成。

築造の過程ではその都度 写真などメールでお知らせいただいて、経過を聞かせてもらっていたのですが、御自分のアイデアも随所に盛り込んでこの1月 めでたく完成。立派に築かれた登り窯にもう びっくりです。

萩焼の窯の操業では鉄分を嫌うと聞かれますが、その土には鉄分を含む土が混ぜられ、釉薬の選定ばかりでなく、登り窯の窯の雰囲気・焼成温度を技法として制御することにより、焼独特のあの淡い色の肌と窯変の妙味が出てくるという。萩焼のあの淡い色や斑点状の様子が窯の中でどんな風に現れてくるのだろうか・・・萩焼の登り窯の操業過程を直に見せてもらえる。

是非とも お祝いかねて 窯焚きの様子をじっくり見せてもらいに行こう……。

また、日本固有の製鉄「たたら」の製鉄炉のルーツにひかれている私には規模は小さいですが、山の尾根筋の風の通り道に築かれた「穴窯」→「登り窯」も その原型の可能性のひとつ。その操業の類似性をつぶさに観察できるチャンスでもある。

本年一番の寒い雪が降る厳しい一日でしたが、家内と二人で山口市吉敷の田中講平さんの陶房「陶房葉月」を訪ね、夜遅くまで 登り窯の初焚きを窯の前に居て、応援や見学に訪れた多くの人たちと共につぶさに見学させていただきました。登り窯の窯前に 一日ずっと居させてもらって、田中さんのホームページの編集用のスナップやデジカメ動画をバチバチ撮影。そのスナップやデジカメ動画をもとに「陶房葉月 登り窯 初窯の一日」のデジカメ記録を作成させてもらい、このページの上にあるスライド動画にまとめさせていただきました。

萩の七変化とよばれる萩焼がこの登り窯の窯変の中で作られてゆく。何度か断片的に登り窯の操業のビデオを見たことがありますが、作業の中身はほとんど知らない、細かな一連の作業が登り窯の温度を上げながら実行されてゆく。

たたら炉による製鉄でもそうですが、シンプルな構造の窯の中で、研ぎすまれた一連の技で萩焼が仕上がってゆくことにびっくりでした。

思いの方が強くて あまりうまく撮れていませんが、知っているようでよく知らなかった登り窯の窯焚きを一日追わせていただきました。この資料作成には 田中講平さんのホームページに使われた写真を数多く使わせていただきました。

田中講平さんのホームページにも「陶房葉月 登り窯 初窯の一日」ほか 陶房葉月の登り窯・初窯の詳細記事が掲載されていますのでご興味のある方はそちらも是非ご覧ください。

なお、「陶房葉月 登り窯 初窯の一日」のスライドが 田中講平さんのホームページにありますので、ご興味のある方はそちらもご覧ください。

■ 田中講平さんの萩焼陶房「陶房葉月」の登り窯 初窯の一日

◆ home page top <http://www.k2.dion.ne.jp/~hazuki/>

◆ 登り窯 初窯の一日 <http://buffalonas.com/mutsu/hazuki/noborigama/noborigama00.htm>

萩焼陶房「陶房葉月」の登り窯 初窯の一日 【抜粋】 2011.1.15.

🇯🇵 登り窯 初窯・初焚き



2011.1月 登り窯開窯



田中さんの陶房葉月 写真中央の山麓 少し登った高台にある

1月14日 初窯を明日に控えた陶房葉月を久しぶりに訪れる。山口市湯田温泉から秋吉台・美祢に延びる国道に入ってすぐ 左手の丘陵地の山腹に田中さんの陶房「陶房葉月」が見えてくる。国道から見るとちょうど小さな二つの丘の張り出しの間の奥まった高台。登り窯の位置としては 風が山へ駆け上がる絶好の通り道に見える。後で田中さんに聞くと「風の通り道」意識したと。早速、初窯を明日に控え、窯詰の作業が急ピッチですすむ登り窯をみせてもらう。



陶房葉月の山際 風の通り道に沿って築かれた登り窯

田中さんの登り窯は一列に並ぶ窯が2基と比較的小型であるが、随分大きい。 また、築造過程ではさほど気にならなかったが、登り窯の傾斜が随分大きい。

立派な登り窯である。

一番手前の大口の焚口に木片などを入れて燃やして、煙突へ抜けてゆく炎によって1の窯・2の窯を予熱する。

作品が可間詰めされた一の窯・二の窯の窯口は登り窯の横にあり、この窯口から窯に作品が窯詰めされ、一旦封入される。

そして、大口からの窯焚きで登り窯全体を約900℃程度まであげ、その後 大口の焚口を閉じ、今度は一の窯・二の窯と順次、さらに高温に焚き上げて、作品を焼き上げてゆく。



陶房葉月 登り窯 「一の窯」と「二の窯」の窯口

封入されていた窯口は薪が投げ入れられる小さな焚口が開けられ、薪を投げ入れては閉じる繰り返しによって雰囲気調整しつつ、窯の温度をさらに上げ作品を焼き上げる。

(萩焼の焼き上げ温度はほかの焼き物の焼き上げ温度が1300℃越えと高いのに比べると比較的低い1200℃越え程度であるという。 ここにも萩焼の特徴がある。)

急ピッチで窯詰めが進む登り窯へ。

「窯の中 入ってもいいよ」と窯の中からひょいと窯詰め中の田中さんが顔を出す。窯を覗くと 隙間なくびっしりと作品が詰められているが、まだまだ 窯詰しないといけないらしい。

また、窯詰途中の煉瓦積みの壁が美しく、アーチも本当にきれい。 昔 建設中の高炉内部の煉瓦積みの美しさに見とれたのをふっと思い出す。

陶芸家はみんな こうなのだろうか・・・とひとしきり煉瓦積みの内部に見とれる。

田中さんのアイデアと器用さには本当にびっくり。

田中さんの話によると「この登り窯で 丸一日焚き続けて作品を焼き上げる。 表の物置場や登り窯の脇に積み上げた材木端の山も薪も今回でほぼ全部使うことになる」という。そんなに使うのかとも思いましたが、一昼夜丸一日焚き続けると聞くと納得である。

「登り窯は一年に数度しか焼けない」「登り窯のコスト考えると登り窯では焼けない」とか 何度か耳にしたことがありますが、準備する作品量も準備する燃料 そして焚き続ける体力。 そのスケールは大変だ。



窯焚きに使われる材木端と薪の一部



1月14日 登り窯の初窯・本焚きを明日に控え、急ピッチで窯詰が進む

1月15日午後 登り窯を音連れると 陶芸教室の皆さんはじめ、数多くの見学者が詰めかけ、窯場の焚口を半円に取り囲んで窯焚きを見ている。

登り窯の焚口大口の前には材木端が積み、次々と焚口に投げ込まれる。焚口を覗きこもうと顔を近づけると 熱い 熱い。忘れかけていた久しぶりのこの感覚、風の通り道 大口の窯の中は真っ赤な炎が窯の奥へ奥へとすごい勢いで吸い込まれてゆく。

本当にすごい迫力。長くは覗き込んではいられない。「これが登り窯か」と。

炉のタイプ・大きさは違うが、かつて鉄を溶解する電気炉の炉前 忘れかけていた久しぶりの感覚である。



登り窯の窯焚きが始まる 2011.1.15.

登り窯の窯の中に入れられた熱電対温度計測器の値は300℃ほど。窯の表面にふれると少し暖かくなっている。

ちらちら腕時計の針を眺めながら窯の温度上昇速度の計測を始める。これも習性が 15分 30分 1時間 ども 1時間で約100℃の割で窯の温度が上昇している。田中さんから教えてもらっていた900℃近辺には夕方暗くなった頃 順調な温度上昇のようだ。

みんな 嬉しそうに窯の火を眺めながらの炉前。待ちに待った登り窯 初窯・窯焚きが始まった。



登り窯の窯焚き 登り窯の大口焚口に材木端が次々と投げ込まれ、窯の温度があげられてゆく 2011.1.15.

順調に窯焚きが進行し、夕方暗くなりだした頃 窯の温度は900℃を越え いよいよ一の窯・二の窯の本焚きの準備が始まる。

一の窯の窯口の下の方に薪を投げ入れる小さな焚口の煉瓦が外され、開閉できるように準備される。

そして、一の窯の天井に登って 左右にある炎確認の小窓が開かれ、炎が噴き出すのが見える。

窯口は黄白色にまぶしくもう中を裸眼では覗けず、窯が高温になっていることがよく判る。

大口の焚口は上部を少し残して閉じられると窯の天井部の左右に小さく開けられた窓からはまるで息をするかのように妖艶な炎がくねる。もう みんな 一の窯の天井から登る炎に釘付け いよいよ 一の窯の焚き上げが始まる。



一の窯の焚口の煉瓦がはずされ、焚き上げの準備



一の窯の天井の小さな小窓からは炎が噴き出し、作業の進行とともに妖しくくねる



見学者もみんな 一の窯焚き上げの開始に釘付けで 窯の天井の炎を眺める

一の窯の小さな焚き口を開いては手早く薪を数本 投げ込んで焚き口を閉じる。無言の中に緊張感がみなぎっている。窯口が開き、薪が投げ込み、そして閉じるたびに天井の炎が変化する。登り窯の焚き口が封鎖されると 空気量が少なくなり、勢いよく天井窓から噴き出していた炎は淡い青みを帯びた還元炎となり、ポツと窯の中に引き込まれてはまた灯る。焚き口が開かれると空気が流入し、天井窓の炎は勢いを増し、投げ込み後 焚き口が閉じられると炎は弱くなって、ポツ息をする炎となる。この炎を眺めながら 薪の投げ入れ位置 投入量 投入間隔を調整しつつ、窯の中にある作品を行きあげてゆく。幻想的な雰囲気の中で 窯の中では酸化還元雰囲気調整される。陶芸家 それぞれの腕の見せ所である。温度は1000℃を越え、作品の釉は溶け出し、作品は舐める炎と反応し始める。この繰り返しで 作品は1200℃越えまで 焼き上げられ、登り窯 窯変の「妙」 窯詰めされた作品が「萩」に生まれ変わってゆく。



一の窯の加の焼き



一の窯の窯焼き 火力の強い薪の投げ入れで さらに高温へ焼き上げる

一の窯の窯焼きが終わると 次に二の窯に移る。同じ作業を繰り返し行って、二の窯に窯詰めされた作品も萩焼に変わってゆく。順調に窯焼きが終了したのは16日未明。まる一日がかりの窯焼きである。その16日朝は 夜から降り続いた雪が登り窯を祝福するかのように吉敷の郷を純白に包み込んでいました。うれしい登り窯 初窯・本焼きが無事終了。 あたらしい陶房葉月の登り窯の完成です。



窯焼きは雪が降り続く深夜も続き 16日明け方に窯焼きを終わりました



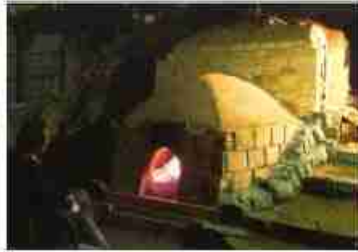
1月16日 窯焼きの終わった朝 吉敷の郷は一面銀世界におおわれました

どんな作品が生まれるのか 楽しみな一日。窯出しは19日 待ち遠しい窯出し。後日 田中さんより 初窯がうまくいったという 便り・作品写真と共に 登り窯初窯記念の萩焼「左馬の茶碗」を送っていただきました。本当にうれしい もうまたとない素晴らしい経験でした。また、「たたら」製鉄炉とこじつけると、風の通り道の山際に据え付けられた窯はたたら縦型炉に近く、簡単に高温と還元雰囲気が作られることにびっくり、また大きさは違うが縄文人が煮炊きに使った焚き口と土器を置く窯にもそっくりと。



2011年 田中講平の萩 「翔 2011」 2011.1月

約1年をかけて自ら築造した田中講平手作りの登り窯が平成23年1月15日開窯
「翔」2011年の期待いっぱいの作品群が誕生しました



花活け「翔」 2011



田中講平作 作品5点 2011



左馬茶碗 陶房某月登り窯 初窯 2011.1.15.



白軸鬼萩茶碗 2011



花活け 2011



鬼萩茶碗 2011



田中講平作 作品5点 2011



左馬茶碗 陶房某月登り窯 初窯 2011.1.15.

陶房某月登り窯の初窯から生まれた「田中講平の萩 2011」【1】 2011.1.15.



田中講平作 作品5点 2011

陶房某月登り窯の初窯から生まれた「田中講平の萩 2011」【3】 2011.1.15.

萩焼の登り窯【概説】 インターネット検索にて

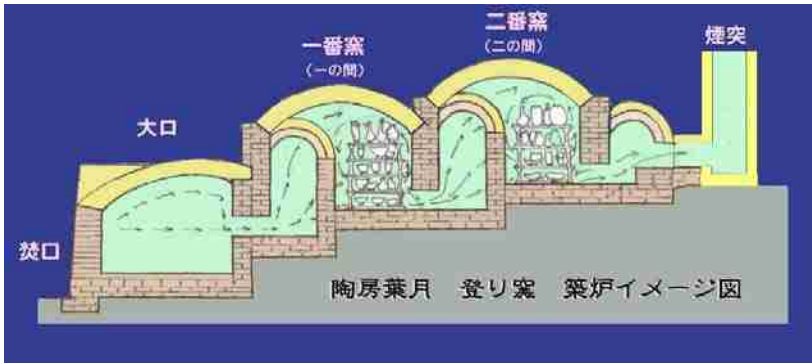
- 参考 1. 田中講平さんの登り窯築造
- 参考 2. 登り窯概説 インターネット検索より
- 参考 3. 萩焼と登り窯 インターネット検索より

参考 1. 田中講平さんの登り窯築造 田中講平さんのホームページより

【 田中講平さんの登り窯 築造過程の登り窯 築造経過の写真 2009.10月→2000.1.15. 】



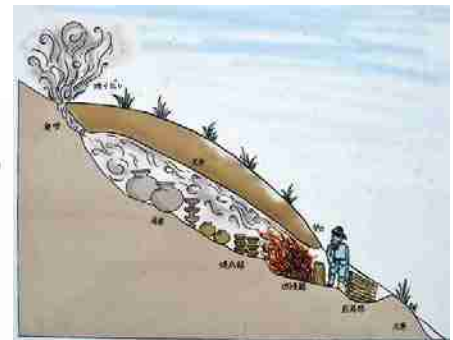
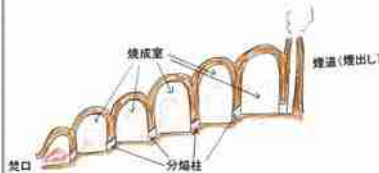
築造中の田中講平さん



参考 2. 登り窯概説 インターネットより採取



登り窯の一例



古代の登り窯

日本でもっとも古い窯は穴窯と呼ばれる山の斜面に穴を掘り、土で作った天井をかぶせた単室の小さな窯。この穴窯を改良して、丘陵斜面を利用して、幾つかの焼成室[窯]が連なるように築いた窯が登り窯。最も下方に“大口”とよばれる燃料を燃やす燃焼室があり、それに接続していくつもの焼成室(窯)が上方に連なっている。焼成室は、数室のものから多いものでは数十室にのぼるものもあります。熱が登って行く性質を利用して、大量の品を一度に焼き上げることができる。

窯焚きの最初に、一番下の大口から木材屑などの燃料を焚き始め、上方にある窯を含め、登り窯全体の予熱ができるので、窯を高温にまで高められる。予熱後、連なる窯の横側にあるそれぞれの窯口から火力の強い末の薪を窯の中に投げ入れ、さらに窯を高温にして作品を焚き上げる。

作品を焼く時の窯の温度は、約1000～1500度というかなりの高温が得られる。

また、大口の焚口を閉じて、空気の流れを遮断し、窯ごとに封鎖されている窯の焚口を開閉することで、窯の中の空気量を調節して窯の中の雰囲気を変化・還元性に調節してそれぞれ窯詰めされた作品を焚き上げることができる。

窯の焚口は小さく開け、焚口薪の投入量・投入回数の調整等による空気量を調整で、目的に合わせ、窯変に変化をつける技法もある。

燃料の薪には赤松の皮をむいて半年以上乾かしたものが用いられ、窯の数にもよりますが、3～4日焼き続ける。

このため、大量の窯詰め作品の準備が必要であるばかりでなく、大量の燃料そして数日つきっきりの窯焚き調整がいるなど大変なコストと労力があるため、最近ではガス窯・電気窯で雰囲気制御しつつ焼くことが多くなっているという。

但し、登り窯での「窯変の妙味」など登り窯でないと出せない「技」「味」があり、登り窯にこだわる陶芸作家もいる。

この登り窯「窯変の妙」は登り窯それぞれの個性であり、陶芸作家それぞれの技法と合わせ、陶芸作家それぞれの個性的な作品が生み出される。

参考 3. 萩焼と窯の技法 インターネット検索より

【 萩焼といっても千差万別 窯焚き技法と相まって数々の萩焼が生まれる 田中講平さんの萩より 】



かいらぎ

切り高台

御本手

萩焼といっても千差万別 窯焚き技法と相まって数々の萩焼が生まれる 田中講平さんの萩より

萩焼は山口県萩市一帯で焼かれる陶器で、古くから「一楽二萩三唐津」と謳われる。

萩焼の大きな特徴は、焼締まりの少ない柔らかな土味と、高い吸水性にあり、

吸水性が高いため、長年使っているうちに茶や酒が浸透し、茶碗の色彩が変化し、「萩の七化け」と呼ばれ愛でられている。

また 形や装飾の簡素さも特徴の一つで、ほとんどの場合、絵付けは行わず、胎土となる土の配合、釉薬のかけ具合、へら目などが、登り窯の作用「窯変」によって様々な表情を生みだすことを想定した上で、その魅力を活かすように作られる。

ごく一般には びわ色や柔らかいクリーム色を呈した焼き物であるが、その他に、御本手(俗にモミジやホシと呼ばれるもの)や梅花皮(カイラギ)といったものがある。御本手はもともと釉薬の欠点と言われていたピンホールを逆手にとって発色の特徴としたもの。カイラギは釉縮れや釉ヒビなどの不完全さを逆用したもの。

このような不完全さ・不均衡さの中に茶人たちが美しさや侘びさびといったものを見出し、それが萩焼の技法として根付いていった側面も見逃せない。

これらの萩焼の特徴・味を引き出し、萩焼の肌表情をつけるのが、「窯焚き技法」と「窯変」である。

萩焼では粗くて鉄分を含む見島土を鉄分の少ない大道の土に混ぜて素土として使う。それらの配合や焼き物素材の表面状態・釉・制作技法などが 登り窯の焚き上げ技法と相まって、焼き物に含まれる主に鉄分が酸化・還元の変化を引き起こし、萩焼特有の発色を起こす。

登り窯での作品焼き上げでは薪が完全燃焼するように、薪を投げ入れて煙が出てきたら薪を入れるのをやめる。これをくり返しながら高温に焼き上げる。

窯の中に空気（酸素）が充分足りていると薪は完全燃焼し、焼物の中にある酸素分は燃えずにそのまま残る。

鉄を含む焼物では、酸化で黄色や茶色っぽくなったりする。萩のびわ色とか言われるのがこの色である。

一方、薪をどんどん入れ、煙が出てても薪を入れ続けると、煙が窯の中に充満し、窯の中が酸欠状態になり、薪が不完全燃焼する。炎はちょっとでも燃えようとして焼物の中の酸素も燃やしてしまい、青黒色を帯びた還元色が出てくる。

これらの発色は焼き物に含まれる鉄分の量や表面や温度と窯の中の雰囲気の状態で大きく変化する。

この微妙な変化を求め、さらに釉の種類を変えたり、薪の太さや投入量を変えたりする。

その上、空気をよく入れ、高温で焼いた方がよく焼き締まるので、焼き締め方も調整する。

酸化で焼いて途中で還元に変えたり、還元を酸化に変えたり、中性という焼き方もある。

土の中に含まれている鉄分が窯変し、赤い色彩や斑点状の模様が現れる「御本手」という技法では

焼き終わった後に焼物が酸素を吸ってあの萩焼特有の模様が生まれる。

そんな色々な変化を技法として組み込み、それぞれの陶芸家独特の萩焼が生み出される。

【 参 考 】

1. 風来坊・Country Walk 萩焼の主原料土「大道士」の採取地 鑄銭司・大道を訪ねる 2009.6.6.
<http://buffalonas.com/mutsu/www/2009htm/walk6/0907daido00.htm>
2. インターネット「萩焼 登り窯」検索
3. 田中講平さんの home page 萩焼陶房「陶房葉月」
<http://www.k2.dion.ne.jp/~hazuki/>